

森嘉兵衛著 「みちのく文化論」を読んで

稲葉克夫

森博士のこれまでの体系的大著述『旧南部藩百姓一揆の研究』『近世奥羽農業経営論』『日本僻地の史的研究』などに比べれば、この四百頁の『みちのく文化論』は小品集ともいえるべき形態だが、その内容は博士が畢生の大事業をなす間に生成・醸造された、堪能すべき蓄で出来あがった名品である。

また、日本社会経済史学界の第一人者である博士の学問志向への心情が察知されて興味深い。

博士は、この本のあとがきでこの本の性格を次のように規定している。「日本全体が水稲生産力を基盤に文化を形成した時期に、東北は水稲生産力を定着できず、苦闘の中で鉱産業を展開し、日本全体が金と鉄を根幹とする近代になって初めて水稲生産を定着せしめることができた。つまり『みちのく文化』は米と金属との両極、金と鉄との両極の間に形成されたのである。ここに編集された小品は、まさにその両極の間を往復しつつ荷電した微粒子といえよいだろうか。」

しかし、この巨多の微粒子は帯電して大きな磁場を形成していた。『みちのく文化論』は五編に分れる。第一編は、「みちのく文化の理解のために」と題し、平泉文化を主眼点とした岩手の文化史を説く。

この中で「岩手は果たして科学・芸術・宗教の発生の地ではあるが、成長の地ではないのか、その原因を明らかにし、発生の地であるとともに成長の地にすること、誤ったイメージを打開することこそ当面の根本問題」（p.17）と教育関係者に訴え、自己の学問の実践課題を明確にしている。

平泉文化についても、それは「東北民の汗と血の結晶によって成ったものである、東北の歴史において自力によってかく偉大な文化を形成したのはこの時代だけであり、この時代だけは中央の文化と平等な発言権をもっている。一度平泉文化を見、八百年も前に中央文化と遜色のない文化を形成したことを思う時、東北型文化の遅滯性が決して宿命ではないことを知る。（東北文化の遅れは「稲葉」文化に対する情熱の欠除から生じているのだ。」（p.61）とその原因に東北の貧困さをあげることに組しない。

もちろん、だからといって博士が空疎な精神主義を唱えているわけではない。退官をひかえた随想「人生の峠」（p.37⁶）で「この地方はどうして近代化しなかったのであるか、私は長い間この原因究明に努めてきた。その答案ができたので一書にまとめ、今それを世に問おう

としてゐる」といつて出版した博士のライフワーク『日本僻地の史的研究―九戸地方史』で、博士の真情はよく分る。

博士は、一生研究の場を岩手におき、その著書や論文には、岩手とか南部藩とかの限定詞をつける。博士があえてこのように岩手に自らを限定するのは恵まれざる郷土に対する並々ならぬ愛情のゆえであるが、しかも博士の論考が地方的問題の窓を通して、常に日本史全体の研究水準を引きあげ、新たな肉づけをしていることは学界のつとに認めていることである。

博士が地方を研究素材としながら、狭い視野に閉ざされない自戒や注意には、私も直接指導をうけた。本書六十二頁の「八戸市史の編纂に当たって」は十年前、八戸市史編さんを始める時、監修者の地位にたれた博士がわれわれ委員のために雪の焼山温泉で説かれたものである。

「地方史編纂において特に注意すべきことは、いわゆる郷土史にならないようにすることである。八戸市の歴史が、世界史なり、日本史なりにとれだけのボルテをもっているか、また逆に八戸市は単に東北の一都市として狭い射程しかもっていないか、また逆にかを明らかにすることが必要である。」

そして原始・中世・近世・近代にわたって五つの分析課題を与えられたのだが、残念ながら博士の要望は果たされなかった。まことに汗顔のいたりである。

第二編は、「南部の風土と歴史」と題し、『日本僻地の史的研究』出版をめぐるの山本弘文との対談と、鉄の問題を中心としている。

対談では博士の農民生活に対する実にゆき届いた観察眼―たとえば曲り屋を税金対策とし、東北の土地制度を複雑ならしめている譲り状の特長の分析などのユニークさに驚く。鉄については、単に技術論でなく、それによって生じた北上山地社会の変動と、せつかくの近代化への芽の挫折などを実に生き生きと語る。

博士を僻地の歴史研究へかりたてた情念は、平泉や鉄にみられる未発の歴史への恨みであろうが、そのもつとも典型的なのは九戸地方の鉄鉱業の衰退という幕末の歴史への痛恨であろう。私はこの時、津輕のりんごの成功をふと思つた。

九戸の鉄山については第五編「僻地」の近代化の条件についてにおいて四十六頁にわたって論じ、結論として「北上山系が近代的な産業を確立しその経営に成功しながら、ついに近代化出来なかつたのは、むしろ封建的財政にその近代化の萌芽利潤を食い荒されたことであつた。」(p.375)と結んだ。五穀の中から「米」をはずして「大根」を入れなければならなかつた北上山系の農民のために、博士は血涙を流すのである。

第三編「みちのくの生活とその周辺」は岩手に題材をとつた小品隨想で、エスプリがきいて面白い。

第四編は「民衆思想の原点」と題し、「近世封建社会における民衆の政治思想」一編だけで構成する。四十頁に及ぶこの論文は、新稿であるが、南部藩政の負担体系に対する領民の受けとめ方と取りくんだ力作である。そしてやはりそれは民衆の立場での思想であつて、学者の思想や為政者の考えではない。博士の歴史へ迫る目は常に民衆の立

場からである。

ここで特に教えられるのは、嘉永の三閉伊百姓一揆における三浦命助・小本の弥五兵衛の立場を中間項とみ、議會政治の芽を指摘している点である。また安藤昌益にとどまらず「夢中翁嘉言」や瀬沢円右衛門や小原常吉などの発言に、藩権力否定の思想を見出していることも重要である。

第五編は「近代化の条件を求めて」と題し、前述の諸編のほかに最終の「断片」という随想は博士の真底の心情の吐露である。

「学問の世界に入って四十五年、日本経済史を専攻してしみじみと思ふことは、ふれたもの・究めたものすべてが断片だったということである。」

「全体をこまぎれにすることは易いが、断片から全体を構成することはむずかしい。君が代の論理は難しい。」

「日本の断片・岩手の文化から、日本の社会と文化の構成原理を考へることは方法的に無理なだろうか。」

しかし、博士はきつぱりという。

「岩手（広く辺地）の文化の成因から日本を考えないところに、日本の文化論や社会理論における方法論上の欠陥があるといったらその意味が分ってもらえるだろうか。」

後世にかかれる歴史は往々にして強者の論理でもって書かれる。しかし博士は劣敗者たる百姓一揆の研究から研究生生活を始めた。また、学者の栄光を求めるものは中央の一等史料を求めて論文を書くのに、博士は「学生としての経済研究のきっかけから岩手大学教授退官まで

の研究生活は九戸郡の研究を根幹としているし、研究が九戸に始まって九戸に終わったということもできる。」（『九戸地方史』下・p.363）¹⁾そして、ライフワークは九戸地方教育委員会協議会に頼まれた仕事のまとめ——「九戸地方史Ⅱ日本僻地の史的研究」だった。

同じ東北の歴史でも出羽側の方はもっと情緒がたゆたう。庄内の米、出羽三山の信仰、日本海文化など、シビアな日本のチベット—北上山系と異なる風土性と歴史がもたらすものかも知れない。

それだけに岩手の文化には限度ぎりぎりの切なさがある。宮沢賢治・石川啄木、さらに高村光太郎などに何か共通のものを私は感ずる、そして森博士の生き方にもそれを感ずる。

博士は、今病床に親しむ体である。しかし、あえて病軀をかって大館に発見された安藤昌益資料の究明のために、大館はもちろん文部省史料館へ、能代へ、八戸へと病む心臓をいたわりつゝ東奔西走する。また目下刊行中の著作集の校正、打ちあわせに寧日もない。この夏も昌益のことで博士と対談する機会を得たが、その学問への情熱にはたゞ頭が下がる。失礼ながら鬼気を感じるといっても言い過ぎでないような気がする。

先年、八戸一の旧家西町屋の古文書を調べるのに同行し貴重な鉄関係文書を多く発見したが、思いがけず南北朝時代の文書、ホロワタ御所の文書が古い長持の底から発見されたが、この文書の存在をかぎつける博士の感覚には名人・達人の域を感じた。

岩手には民俗学の「遠野物語」もある。この世界の幻想こそ厳しい岩手の風土と歴史の中で重荷をせおいながら人々が生き続けた条件だ

ろうが、最近こういう角度から百姓一揆や民衆運動を考察する人々もあらわれてきた。

森博士の研究を基盤に、今後、後進のわれわれが継承・深化すべき点はなお多くあろう。そのためにも博士が健康に留意されて、非力怠惰なわれわれを叱正教導してくれることを期待するものである。

（「みちのく文化論」法政大学出版局 一二〇〇円）